

特 259

674

菅原時保禪師

碧巖錄講演

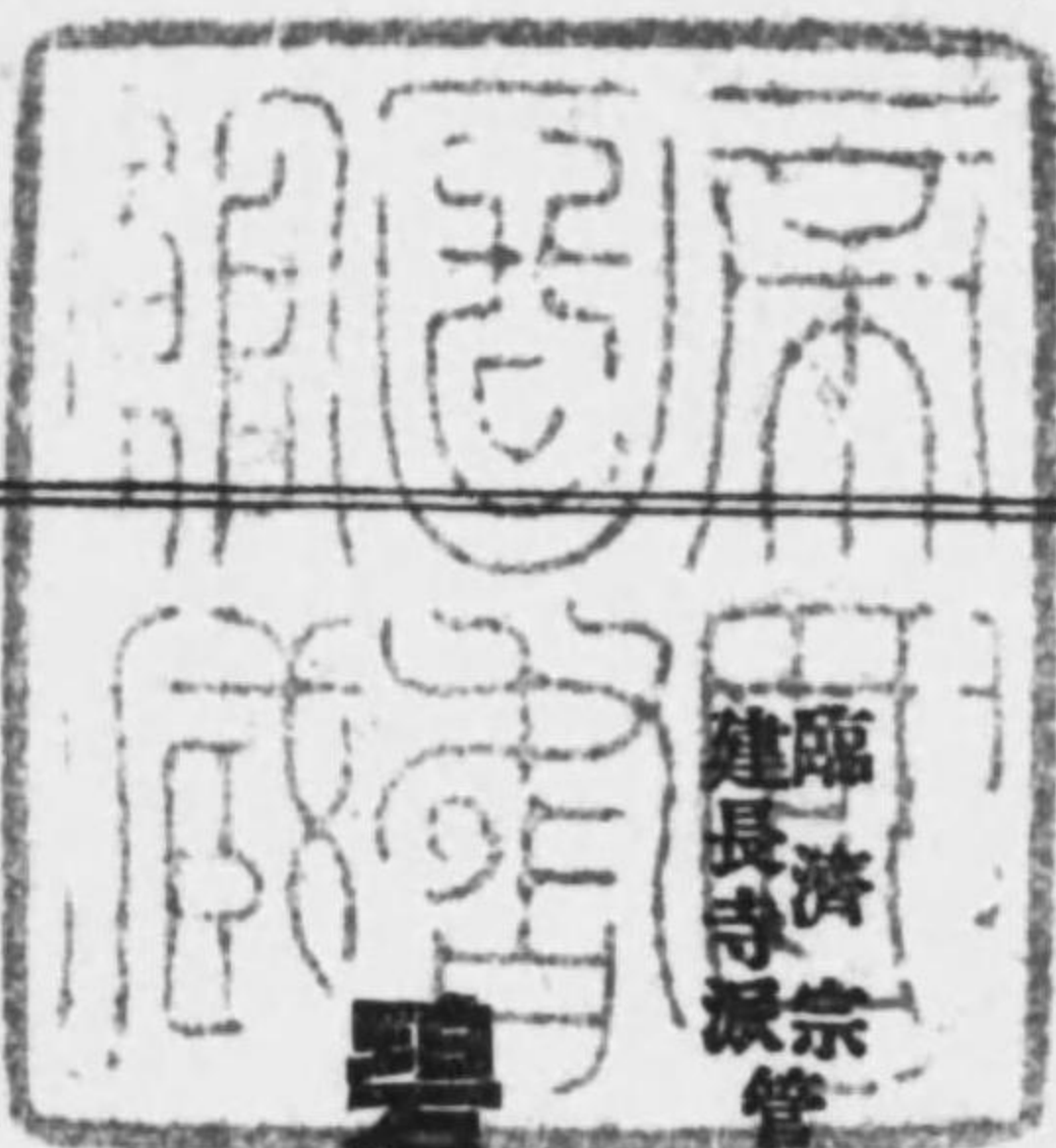
(其二十二)



始



特259
674



菅原時保
建長寺派

菅原時保禪師

碧

巖錄講演

(其二十二)



碧巖錄講演 其二十二 目次

第五十九則 趙州何不引盡……………一頁
第六十則 雲門拄杖化龍……………四三頁
第六十一則 風穴家國興盛……………六一頁

巖碧錄提講

第五十九則 趙州何不引盡

井上君曰く、「趙州禪師は曹州の生れ、北方支那の人。三十則に鎮州出大蘿蔔頭」と云ふ鎮州は趙州からあまり遠からず。又四十五則に我在青州作一領布衫重七斤と云はれた青州は故郷なる曹州の近所である。

苟も禪の公案を徹底的に鑑賞するには其の公案の背景、社会的、歴史的、地理的をよく知つて居なければなりません。」と。如何にも然りである。—— されど如何に其の背景、其の社會

的、其の歴史的、地理的を明白仔細に研究しても、其の人の其の時の心情は外面から忖度するに止まつて、心情底の如何に至つては徹底的に知ることは出来ぬ。——背景、歴史、地理、それを明細に識得して公案を鑑賞する、元より悪しからず。然れども、そのみで公案の總てを盡したりとは云へぬ。蓋し公案そのものは或は多少背景云々に關すと雖も、其の實は其の人の心情如何にある。故に衲は背景云々を一切閑却するに非ず、只重きを其の人の心情におく。——何れにせよ公案の眞意義は公案の主人公にあらざれば何人と雖も紅心に的中はしない。——抑、公案は學者その人の参考に供するのであるから無論

背景云々は好這の資料である。

◎垂示

垂示云、該天括地、越聖超凡、百草頭上、指出涅槃妙心、干戈叢裏、點定衲僧命脈、且道、承箇什麼人恩力、便得恁麼、試舉看、』

讀方

垂示に云く、天を該ね地を括り、聖を越え凡を超ゆれば、百草頭上に、涅槃妙心を指出し、干戈叢裏に衲僧の命脈を點定せん。且く道へ、箇の什麼人の恩力を承けてか便ち恁麼なることを得たるや。試みに舉す看よ。』

字解、分解。

四

該天、越聖、該は包含の義、括は總結の意。今日の言葉で云へば絶対的の大活動をなすこと。一切の色は是れ佛色、一切の聲は是れ佛聲、と云ふ境界になりし人の動作底、所謂疎言細語第一義に歸す、それである。——百草頭上、干戈叢裏、是れは前の二句を事實に證明したのである。『涅槃妙心、涅槃は梵語で佛性、眞如、と見て大差なし。佛教學者は、小乗では何々、大乘では何々、——と色別するが、要するに圓滿無缺の境界のこと。——點定衲僧命脈、これは殺活自在の妙手腕を云ふ。例せば兩堂の雲水僧が猫兒を争ふ、其の場に南泉禪師が

臨み、一刀兩斷に點定せられた如き、蓋しそれである。——恩力は庇護又は援助。——

提講。

天地の間に居して天地の間に居らず、聖凡の中に隔して聖凡の中に隔せず。それでなければ天を該ね地を括ることも聖を越え凡を超ゆることも出来ぬ。天地の大祖となる力量ある大丈夫にして始めて握り得る鍵を該天括地、越聖超凡、と云ふ。此の鍵は如何にして握り得るか。云く、他なし。因地一聲、絶後再生。見性だ見性だ、大悟だ大悟だ。眞壁の平四郎でも一回大悟し來れば吳下の舊阿蒙に非ず。即座に百草頭上に於て涅槃妙心

五

を指出することが出来る。其の自由、其の自在、大地を轉じて黄金となすのみに非ず、黄金を變じて大地となす、極めて容易である。恁麼の力量あるが故に、是非得失等の大論争が干戈の如く前後左右より押しよせ來ると雖も、それに對し泰然自若、一々彼をして安心立命せしむること、大岡越前の判官が一刀兩斷に所置せられた、それ以上である。かゝる大機妙用の手腕は要するに何人の援助か。何者の恩惠か。——恁麼の事を知らんと欲せば左の本則に參じて知るべし。試みに擧す看よ。」

◎本則

擧、僧問趙州、至道無難、唯嫌揀擇、纔有語言是揀擇、和

尙如何爲人、州曰、何不引盡這語、僧云、某甲只念到這裏、州曰、只這至道無難、唯嫌揀擇。」

讀方

擧す。僧、趙州に問ふ、「至道無難、唯嫌揀擇、纔に語言有れば、是れ揀擇なり」と。和尚如何ぞ人の爲にする。」州曰く、「何ぞ這の語を引盡せざる。」僧云く、「某甲只這裏を念到するのみ。」州云く、「只這の至道は無難、唯揀擇を嫌ふ。」字解、分解。

如何爲人、是は問僧の主眼である。「其の意は、纔に言語あれば是れ揀擇と云はるゝが、然らば人を濟度なさるに言語を以

てせず、何を以てなさるか。——不引盡、是は言葉を途中で切らずに首尾一貫する様に語れと云ふこと。——這語、是は趙州禪師の常に垂語せらるゝ全部のこと。曰く、至道無難、唯嫌揀擇、纔有語言、是揀擇、それである。——念到、暗記してをる、と云ふ意味に用ふべし。念じて到るではない。到の字は軽く見るべし。——這裏、暗記の目的句、それを指す。

提講。

又しても至道無難に関する問答。流石、趙州禪師であるから、同じ至道無難云々であるが、問僧次第で臨機應變、自由自在に

納僧の命脈を點定せらるゝお手の中は實に忍入つたものだ。

ある日、一人の僧が趙州禪師に向つて、「禪師は常に至道無難、唯嫌揀擇、聊かでも此の至道は言句を以て説明したら至道を去ること遠し、と云ひながら、御自分では言句文字を使用して至道を提唱しておいでになる。知らず、それでは至道に遠ざかるではありませんか。」と趙州禪師の脚下を勘檢しに來た。「(此の僧、所謂只の鼠ではない。さればと云うて没量の大人では無論ない。云はゞ勇氣勃々たる一箇の野心僧。)すると趙州禪師、口、壁上に懸るかと思ひの外、例の唇皮禪を以て容易に、「拙者の常に云ふ文句はそれだけではない。お前はまた半分し

か云うてをらぬ。苟も人の説にかれこれと非難を入れようと思ふなら、垂語の全體を陳述し、然る上に於て意見を云ふなら敢へて不道理ではない。然るに全體を云はずして攻撃の矢を放つと云ふは少く不出來ではないか。」と。此の言葉、至道そのものであることを問僧、知るや知らずや。無論知らざるが故に、僧「私は禪師の垂語は以上申し述べただけしか記憶して居りません。」と、趙州禪師の釣言に知らず識らず引か、つて泥を吐き出した。趙州禪師の脚下點檢どころか、自己自身の心中を糞草鞋のまゝで縦横無盡に踏みにじられたことを夢にも知らぬらしい。——大量の趙州禪師、子供の手を引いて一本橋でも渡るやうに、曰

く、「此の至道は無難なり、唯揀擇を嫌ふ。」——いかにもく、至道は無難、唯揀擇を嫌ふ。——然るに至道に向つてかれこれと高論卓説を下す人があるが、思はざるの甚だしき者と云ふべし。」

◎頌

水灑不着、風吹不入、虎歩龍行、鬼號神泣、頭長三尺知是誰、相對無言獨足立。」

讀方

水灑げども着かず、風吹けども入らず。虎のごとく歩み、龍のごとく行く。鬼のごとく號び、神のごとく泣く。頭の長さ

ことは三尺、知んぬ是れ誰ぞ。相對するも無言、獨り足立せり。」

字解、分解。

水、風、此の二句、次の虎歩龍行の一句、共に趙州禪師の答話、それを頌じたものなり。——鬼號神泣、是は趙州禪師の答話に違うては鬼神も號泣すると賞讃したのである。——以上は普通一般の説明。井上君は、水灑不着、風吹不入、此の二句を、至道即宇宙絶對そのものは如何なるものの支配も受けない、況んや人の言論に左右せらるべきものではない、と云うて、孟子の江漢以濯之、秋陽以暴之、皜々乎不可尙己、を引き

て證明して居らるゝが、如何にも然りと納は共鳴する。——次の虎歩龍行、鬼號神泣、是れも井上君の説に感を同じうせざるを得ず。曾て趙州禪師の言行を形容して、象王嘖呻、獅子哮吼、と雪竇禪師が頌じられた如く、茲でも趙州禪師の言行を形容して、虎歩龍行、鬼號神泣、と云うたものであります。——頭長三尺、是は趙州禪師を福祿壽に比した。其の所以は、趙州禪師は百二十歳まで壽を保ち、而して其の道德は禪界の唯一、門下生を教化すること無數。果して趙州禪師、頭長三尺、でありしや否は不明である。(頭の長きは長命の相。——獨足立、是は趙州禪師を福祿壽の像と見立て、吟じたのである。故に獨

り足立と棒讀に讀むべし、とは井上君の説。無論しか讀むべきである。

提講。

至道そのものは、水そのものが既に至道、風そのものが既に至道、故に水も風も如何ともなす能はず。趙州禪師は至道、至道は趙州禪師。趙州禪師と至道、至道と趙州禪師。二にして不二、不二にして二。或時は趙州禪師となり、或時は至道となる。』其の活動を超人的の虎の如く龍の如くに、又は鬼號し神泣く、と形容したものである。しかのみならず肉體に於ても非凡である。見よ其の長壽を。長壽から推せば或は頭長三尺であつたか

も知れぬ、と雪竇禪師の忖度。是が詩人雪竇禪師の特長である。趙州禪師の無舌の舌を以て言語を弄せらるゝ、それは無言の木像が無言のまゝ人に感動を與ふるが如く、それ、それだ、と云ふ意で、趙州禪師を福祿壽の像としてかく頌じたものである。

雪竇禪師の至道を拈提せらるゝ工夫の妙、作略の功、可仰可敬。——序に信心銘を参考の資料に略解を加へて添へておきませう。三祖僧璨大師の作。聞く、禪の意味を文字に現したは之を以て嚆矢となす、と。信否は衲の薄學、保證は出來ませんが、如何にも簡にして其の要を盡してをります。趙州禪師の愛賞翫弄せらるゝ、宜なるかなである。

至道無難、』至道とは至極の大道。如何なる佛祖と雖も是に依らざる者なし。而して平坦、而して四通八達。――

唯嫌揀擇、』然るに學人自身が自分の勝手を以て妄りにアーノ、コーノと揀擇して岐路に迷ふ。それが爲に、無難の大道が嶮路となる。

但莫憎愛、』迷心より憎愛の念を起し、憎むべからざるを憎み、愛すべからざるを愛す。それが甚だよろしからず。それだになければ大道は洞然明白。

洞然明白、』明鏡、その如く胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ず。大明に私照なし。本來の面目、本地の風光、明にあらざる

なし、白にあらざるなし。されど凡夫のはかなさで、心、常に平清なる能はず。

毫釐有差、』一念の迷ひに地獄を生じ、一念の悟りで極樂となる。迷ひ故に三界城、悟り故に十方空。

天地懸隔、』初一念が大切、―― 初一步が大事。一步の差、東西千里となり、初一念の差、苦樂千重となる。元を輕視すべからず、始を閑却すべからず。

欲得現前、』至道そのものは元より洞然明白、常に蓋天蓋地、面前に露堂々である。然るに自己自身が我他彼此の妄想分別を起し、強ひて天地の懸隔をなす。

莫存順逆、』苟も至道そのものを現前せしめんと欲せば、「けれども、一足づゝは踏みとまれ、ほしい、をしいの世の渡り川。」と云ふ道歌を守り本尊として常に注意を怠る勿れ。ほしいにつけ、をしいにつけ、一足づゝ踏み止れば、踏み止つた處に至道が現ずる。順とは我が意に適する事柄、逆とは我が意に適せざる事柄。

違順相争、』違順は、憎愛、順逆と異字同意。不揀擇の至道に向つて揀擇することを違順相争ふと云ふ。憎いと云ふも可愛いと云ふも何れも雲煙に非ざれば色眼鏡。本來の面目には色眼鏡なし。本地の風光には順逆の雲煙なし。其の色眼鏡、其の雲煙、

それが至道の靈光を遮斷する。

是爲心病、』心の病氣。肉體の病氣は重しと雖も恐るゝに足らず。心の病氣は輕しと雖も恐るべし。大いに恐るべし。何が故に。毫釐の差、天地懸隔。

不識玄旨、』本來の面目、それが玄旨だ。本來の面目は大道の本體にして眞理の風光。人々具、箇々圓。——心外に向つて是を求むるは愚の骨頂。——喫茶喫飯の處に歴々分明である。捨てんとして捨つる能はず、去らんと欲して去る能はず。形あれば影あり、形影雙々底。

圓同大虛、』歴々分明にして圓滿周遍なる様子、大虛のそれに

比すべきか。明暗の到達せざる處ありと雖も大虚の到らざる處なし。

無缺無餘、「天にあつては天の如く、地にあつては地に似たり。柳に入つて緑、花に入つては紅。大に用ふれば大、小に用ふれば小。知者は知、仁者は仁。隨縁赴感、——それ、それが至道の端的底。——

良由取捨、「管を以て天を見、錐を以て地を計る。天の小なるに非ず、地の薄きに非ず。——是を愛すれば悪も善となり、是を憎めば善も悪となる。取捨の心は至道の禁物。

所以不如、「至道は從來、如々である。衆生本來佛なり。生れ

子が次第々々に智恵つきて佛に遠くなるぞはかなし。」取捨の智恵を去れ。得失の妄念を除け。——されど無念無想と誤認する勿れ。所謂流れに随つて性を認得する、それ、それである。莫逐有縁、「有りと云はば有りとや人の思ふらん、答へもぞする山彦の聲。」有に執するも一の迷ひ。——

勿住空忍、「無しと云はば無しとや人の思ふらん、答へてもなし山彦の聲。」無に著するも亦是れ一の迷ひ。有無の二つを放下せざれば至道の端的は手に入らぬ。——有無を放下する其の策如何。曰く、

一種平懐、「それだく。有無の二つを脱落し、差別の妄想を

超越すれば、イヤでも一切の迷霧は

泯然自盡、』百年の闇黒も一點の燈火で明煌々となる。無量劫來の迷夢も一念發起の心光で總ての相對を照破し盡す。

止動歸止、』性波を靜止せんとすれば性波愈起る。

止更彌動、』水の懸々、——燈の焰々、——停止する處なし。

されど、何人も性波を靜止せんと欲しつゝ、更に性波を起すを如何せん。一波起れば千波萬波で、畢竟停止する處なし。

唯滯兩邊、』差別の對待に、有無の相對に、頭出頭沒。來る日もく、それでは

寧知一種、』何年たつても至道の本體を知ることも見ること

も出來ぬ。之是を葉を摘み枝を尋ぬる痴漢と云ふ。

一種不通、』至道の本體、そのもの、それを因地一聲下に於て大悟透徹せざれば

兩處失功、』未悟以前の善惡は善惡共に惡。——故に

遣有沒有、隨空背空、』有無の二つは何時か離れん、で常に見に墮せざれば斷見、斷見に住せざれば常見。——隨處に主とな

り得ることは出來ぬ。至道そのものは眞空にして妙有、——

妙有にして眞空。——故に處々眞、處々眞である。

多言多慮、』語れば語るほど其の實に遠ざかり、思へば思ふほど其の體を離る。

轉不相應、「眞に然り。相識滿天下、知心能幾人。眞箇至道に相應せんと欲せば

絶言絶慮、「所謂、冷暖自知するより外に方便はない。それには大死一番せざるべからず。大死一番、絶後再生し來れば無處不通、「天を以て地となし、地を以て天となし、有を以て無となし、無を以て有となし、大を以て小となし、小を以て大となす。その自由、その自在、可謂、轉轉々阿轉々。——何と愉快ならずや。——

歸根得旨、隨照失宗、「直に根源を極むるは佛祖の印する處、徒に枝葉を尋ぬるは衲等の笑ふ處。——自己に返照すれば至

道の端的は常に湛然、心外に法を求むれば至道の本領を失却す。故に云ふ、

須臾返照、勝却前空、「一寸坐れば一寸の佛、寸々積んで丈六の金身となる。「自己是れ至道、自己の外に一物なし。自己を返照すべし。

前空轉變、皆由妄見、「迷故三界城、悟故十方空。迷ふな迷ふな。悟れ悟れ。悟りと云うても悟りに悟り方がある。

不用求真、唯須息見、「玉を探らんと欲せば波をしづむべし。性海の大波小波をしづむれば至道の玉は自然に顯現する。

二見不住、慎勿追尋、「波を離れて水なし、水を除いて波な

し。波即水、水即波。此の道理が手に入らば、二見に住するも追尋するも敢へて妨げなし。然れども、理は頓に悟ると雖も行は漸にあらざれば、似て非なるを如何せん。故に二見に住する勿れ。追尋するを休めよ。

纒有是非、紛然失心、』是非は順逆又は真妄又は憎愛。——憎愛は心の本體に非ず。真妄は心の本領に非ず。順逆は心の本分に非ず。是非は心の本質にあらず。心の眞面目は、火に入つては火となり、水に入つては水となる。そのなり得ると云ふ處に着目すべし。

二由一有、一亦莫守、』二は差別、一は平等。平等即差別、差

別即平等と云ふ妙處を眞箇掌握し來らば、一を守れと云うても守りはせぬ。妙處を眞箇掌握せざるが爲に、守る勿れと云うても守る。

一心不生、萬法無咎、』無念無想と思ふな。無我無心と認むな。心は死灰に非ず、常に生々して居るぞ。心境一如、物我不二。それになれ、それに。——

無咎無法、不生不心、』法は法のまま、無法、心は心のまま、不心。故に無咎、不生、と云ふ。眞箇此の妙致を知らんと欲せば、人、橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず、と云ふ句に參じて知るべし。

能、隨境滅、境逐能沈、能とは自己、境とは他物。

境由能境、能由境能、境に對して能となり、能に對して境となる。境、獨り境たる能はず、能、獨り能たる能はず。されど其の元は一なり。

欲知兩段、元是一空、至道の外に何物もなし。

一空同兩、齊含萬象、心は萬境に隨つて轉ず。それが一空同兩、——そのまゝ、それが萬象を含む。一月普く現ず一切の水。一切の水月、一月に接す。

不見精粗、寧有偏黨、百草頭上、明々たり祖師の意。元是一精明、分れて六和合となる。どこに精粗があり、どこに偏黨が

ある。一見同仁三界の人。——

大道體寬、無難無易、天、高うして鳥の飛ぶに任せ、海、濶うして魚の躍るに従す。——天に四壁なく地に門なし。行くも歸るも大道ならざるなし。諸も舞も大道ならざるなし。何れの處に難ありや。何れの邊にか易ある。難易は大道そのものにあらずして大道に迷ふ其の人にあり。——看よ、

小見狐疑、疑ふべからざるを疑ふ、是を狐疑と云ふ。狐疑なるが故に小見。——小見の人ほど大道を手に入れんとしてアセル。

轉急轉遲、アセればアセルほど、勞して功なし。知らずや、

自己の影を恐れて走れば走るほど影も亦走る。影を恐るゝなら
走らずして踏み止まれ。

執之失度、」その結果、

必入邪路、」邪路とは心外に法を求め、己に迷うて物を追ふ、
それ、それが邪路。

放之自然、」一切の妄念、邪慮を放下し來れ。さすれば大道は
目前に嚴然たり。何が故ぞ。大道そのものの

體無去住、任性合道、逍遙絕惱、」草木國土悉皆成佛、盡法界、
總て是れ大道。喫茶喫飯、起居動作、そのまゝ、道に合し性に
任す。何れの處にか煩惱ある。逍遙を欲せずして自然に逍遙た

り。—— 憐むべし、無知の人は。

繫念乖眞、」見るもの聞くもの、それに着しそれに執し、脚下
底、露堂々たる大道を馬糞視して去る。—— 然らざれば、默
照禪、それに没入す。之是を昏沈と云ふ。

昏沈不好、不好勞神、」無駄事は百年修しても千年修しても無
駄は無駄。—— 徒に神を勞するのみ。正師につき禪を修せざ
れば無駄々々。されど現今正師なきを如何せん。眞箇の處を語
れば必ずしも正師の手引はいらぬ。月を見ては月を正師とし、
花に對しては花を正師とすべし。

何用疎親、」疎親は彼に非ずして我にあり。われ親ならば一切

の事物自然に親となる。われ疎なれば自己を併せて疎となる。其の要訣は精神一到にあり。

欲趣一乘、勿惡六塵、一乘とは如何なるものぞ。曰く、至道。至道とは本具の佛性。——之是の佛性、古往今來、未だ曾て變色なし。されど六塵のために常に恒に穢染せらる。故に心王外敵のために其の權威を失す。豈我を遮るアルプス山あらんや。猛進々々。

六塵不惡、還同正覺、泥棒を擒へて見れば我が子なり。撲落非他物、縱横又非塵、山河並大地、全露法王身。——知者無爲、至道のまゝ、法性のまゝ、任運、寒の時は寒、暑の

時は暑、それが知者である。それが至道である。然るに

愚人自縛、寒に逢つては寒を恐れ、暑に遇つては暑を惡む。生を愛し死を憎む。強ひて煩惱をこしらへ、務めて煩悶を起し、自分と自分で自由を不自由に、自在を不自在に、之是を無繩自縛と云ふ。

法無異法、唯一乘法、無二亦無三。至道と云ふも一時の名、況んや其の他の名をや。本來無一物。——

妄自愛着、自己の色眼鏡で、黒からざる物を黒と思ひ、白からざる物を白と認め、主客顛倒して居る。それが凡夫の常。

將心用心、影は形に依る。波は水に依る。水を離れて波なし。

形を外にして影なし。然るに形を忘れ水を捨て波を求め影を逐ふは

豈非大錯、門より入るものは家珍に非ず。自己の胸中に珍寶がある。脚下照顧、——自己返照。——

迷生寂亂、悟無好惡、夢裡明々有六趣、覺後空々無大千。

——それを知らざるが故に、

一切二邊、妄自斟酌、是だの非だの、又は善だの悪だの、若しくは憎愛、得失、吉凶、禍福、妄想に妄想を重ね、幻影に幻影を添ふ。それらは一切

夢幻空華、何勞把握、眼病者の空華、狂病者の妄想。妄想と

云へば佛法も世法も妄想。——空華と云へば聖も凡も悟りも迷ひも空華。——水中の月影、如何が把握せん。徒に勞するのみ。故に

得失是非、一時放却、清風明月を拂ひ明月清風を拂ふ如くに、一切拂ひ拂ひ盡して拂ふべきなき、それも拂ひ盡すべし。眠るから夢を見る。

眼若不睡、諸夢自除、夢は睡眠中の産物、睡眠せざれば夢なし。

心若不異、萬法一如、性海に大波小波なければ性海は常に湛然たり。至道の面目は、それそこに。——

一如體玄、兀爾忘緣、一佛の眞法身は猶虛空の如し。物に應じて形を現ずるは猶水中の月の如し。臨濟禪師の所謂嫌ふ底の法なし。

萬法齊觀、歸復自然、一雨あられ雪や氷と隔つれど、落つれば同じ谷川の水。總てが法性、一切が至道。

泯其所以、不可方比、一切差別の因縁を至道の寶劍を以て斬斷し來れば、其の境致、其の玄妙、只自ら怡悅すべし。物の比倫すべきなし。

止動無動、動止無止、一動止元來不二。止を外にして動なく、動を除いて止なし。止は動に依り、動は止に依る。故に動止は

一時に兩立せず。

兩既不成、一何有爾、一と云ふも一と云ふも實は假名。或時は一となり、或時は二となる。されど其の本體は一でもなく二でもなし。強ひて是を如々と云ひ、——號して是を至道と云ふ。

究竟窮極、不存軌則、所謂、言語道斷、心行所滅。——修して知るべし。證して得べし。

契心平等、所作俱息、一平等と云ふ、云ふだけ不平等。要は契心するにあり。契心すれば一切は我が有。所作そのまゝが至道。

——云爲そのまゝが法性。——

狐疑淨盡、正信調直、」雲はれて後の光りと思ふなよ、もとよ
り空に有明の月。」

一切不留、」心にかゝる雲もなし。

無可記憶、」胸中は瀟洒、一點の迷雲なし。大悟絶點。——

虚明白照、」そのまゝ、それ天真自如。——敢へて

不勞心力、」行かんと要せば行き、坐せんと要せば坐す。何れ

の處にか至道ありや。之是を

非思量處、」と云ふ。

譏情難測、」分別思慮の及ぶ處に非ず。強ひて是を

眞如法界、」と呼ぶ。眞如法界には從來

無他無自、」差別もなければ平等もない。況んや善悪是非得失
に於てをや。

要急相應、」恁麼の境致に到達せんと欲せば、

唯言不二、」心身一如、物我不二。所謂滴水滴凍。

不二皆同、」一佛成道觀見法界、草木國土悉皆成佛。——

無不包容、」一月普現す一切の水、一切の水月一月に接す。

十方智者、」三世の諸佛も歴代の祖師も。水流れて元、海に入
る。

皆入此宗、」此の宗とは如何なる宗ぞ。曰く、不二宗。——

不二宗は萬里一條の鐵。故に

宗、非促延、」促は短、延は長。短者は短法身、長者は長法身。されど伸ぶる時は法界に、收むる時は方寸に。

一、念萬念、」——萬念が一念。十世古今、始終當念を離れず、無邊の刹界、自他毫端を隔てず。恁麼の境致に徹底し見よ。

無在不在、十方目前、」歩々是れ清風、——歩々是れ道場。立つときは天地と共に立ち、坐するときは天地と共に坐す。故に云ふ、

極小同大、忘絶境界、極大同小、不見邊表、」所謂、大は方所を絶し、細は無間に入る。——云ひ換へれば

有即是無、無即是有、」心經の色即是空、空即是色。——豈

敢へて心經を借らんや。一切の萬法、事實然りである。それを知らざるは心眼の盲目者である。——

若不如是、必不須守、」衲は云ふ、有即是無、無即是有、と云ふ處に好し到達すると雖も是を守らば不是、と。——守るところを用ひざるが故に

一、即一切、一切即一、」となる。然らざれば眞箇、一即一切、一切即一、となる能はず。果して一即一切、一切即一、となり得れば、

但能如是、何慮不畢、」それでよし。それが佛であり、それが如來であり、それが至道である。之是を稱して

信心不二、不二信心、』と云ふ。されど信心不二、不二信心の端的は

言語道斷、』云ふに云はれず、語るに語れず。

非去來今、』過去でもなければ現在でもない。無論、未來でもない。而して過去であり現在であり未來である。』――

以上は、本則提講の序ついでに胸中に浮びしまゝ、筆に任せて文字を羅列せしのみ。閑時を得、更に管城士に命じ再記せん。

(昭和十四年二月二十五日講演)

第六十則 雲門拄杖化龍

◎垂示

垂示云、諸佛衆生、本來無異、山河自己、寧有等差、爲什麼却渾成兩邊去也、若能撥轉話頭、坐斷要津、放過即不可、』若不放過盡大地不消一捏、且作麼生、是撥轉話頭處、試舉看、』

讀方

垂示に云く、諸佛衆生しよぶじやう本來異ることなし。山河自己さんか寧ぞ等差あらん。什麼なんとしてか却つて兩邊を渾成ほんせいし去るや。若し能く

話頭を撥轉して、要津を坐斷するも、放過することは不可なり。若し放過せざれば、盡大地、一捏をも消せざらん。且く作麼生か、是れ話頭を撥轉する處ぞ。試みに擧す看よ。」

字解。

渾成は結合と見るべし。——兩邊は二箇の事柄。——去

は歩行の意でなく、終了の心。——撥轉話頭は一言下とか又

は一句下と云ふ心なり。——坐斷要津は急處を掌握する意。

——放過は油斷又はナゲヤリ。——不消一捏、ひとつまみにしてしまふ。——

分解。

諸佛衆生、本來無異、四大假和合の上から云うても同一、心性の方から見ても不二。然るに諸佛衆生と分る所以は業の因縁と修行の因縁に依る。——

山河自己寧有等差、諸佛衆生のみが四大假和合ではない。山河草木、其の他一切の物體、何れも因縁生である。豈差別あらんや。——

爲什麼、却渾成兩邊去也、知るべし、因縁の然らしむる處、作業の然らしむる處。もと是れ同根生と雖も、豆となつて煮らるゝあり、豆がらとなつて其の豆を煮るあり。

若能撥轉話頭坐斷要津、例せば、一則の公案を拈出し、佛

來も祖來も、迷來も悟來も、悉く打破し去る、それが話頭を撥轉して要津を坐斷す、である。——要津とは大事な渡し場、佛祖の命脈とも云ふ。——

放過即不可、佛祖の命脈を坐斷する力を得ても、そのままに捨ておけば何の用をもなさず、更に聖胎長養しょうたいちやうやうし以て活用すべし。若不放過、盡大地不消一捏、正念相續であれば愈々轉々自在になる。果して然らば一舉手一投足、一々が超佛越祖の境界となる。

提講。

心佛及衆生、是三無差別、と云ふ處に通達し來れば、世の中

は日々是れ好日、——五日一風、十日一雨で御代泰平。處が自己と云ふ迷盲の私見にとらはれ、佛と衆生と宇宙と人類と兩邊の差別を起すを如何せん。——此の差別兩邊を打破し以て要津を坐斷せんと欲せば、話頭を撥轉するに如かず。見よ趙州禪師、黃檗禪師、臨濟禪師、何れも話頭を撥轉して要津を坐斷なされた。其の話頭は大悟だ大悟だ。大悟底より吐露し來る其の一言半句、極めて小なりと雖も、至つて大なる宇宙を一捏に消して尙餘りあり。左に要津を坐斷する底の話頭を拈出し來つて、諸君の面前に呈供せん。

◎本則

舉、雲門以拄杖示衆云、拄杖子化爲龍、吞却乾坤了也、山河大地甚處得來、

讀方

舉す。雲門、拄杖を以て衆に示して云く、「拄杖子、化して龍と爲り、乾坤を吞却し了れり。山河大地、甚れの處より得來る。」字解、分解。必要なし。

提講。

雲門文偃禪師のことは前に再度申し述べてあるから今は略す。

雲門以拄杖示衆云、「此の處へ圓悟禪師の著語に、點化在臨時、とある。點化と云ふは龍門の魚が龍と化することを云うたもの。雲門の拄杖が龍となつて一滴の水を以て四天下に雨を降らすか、それとも蛇となつて蛙に吞まるか、大衆眼を張つて見るべし。又曰く、殺人刀活人劍、と。此の拄杖子が殺人刀となつて人を殺すか、活人劍となつて人を活かすか、それは雲門の腕にある。——恐らくは雲門禪師、人を殺すことを知つて、人を活かすことを或は御存知ないかも知れぬ。——とは云ふもの、拄杖子を拈出したばかりで大衆の眼睛を換却した處は流石雲門禪師である、と托上された。敢へて雲門禪師でなくとも

是れ位のこととは三歳の童子と雖も遊戯の序になして居るぞ、と
衲は云うてやる。

拄杖子化爲龍、「龍と化したら蚯蚓にはなれぬ。拄杖子その
まゝでなければ隨縁赴感で、柳にも櫻にも又は月にも雪にも、何
にでもなることが出来る。今となつては忠言無用。龍と化した
ら龍として仕用する外はない。雲門禪師は如何にも大神通家の
如く、乾坤を吞却し了れり、と盡十方法界を一條の拄杖子になさ
れたが、衲等の眼から見ると尋常底である。衲等は常に一毫端
に寶王刹を現じ、微塵裏に大法輪を轉ず。」——一粒粟中に世
界を藏し、半升鍋内に山川を煮る。」——吾奴は識らず錦囊の

重きを、青山暮色を裏み得て歸る。」——古歌に、「天地をくつ
と丸めて吞む時は、須彌山とても咽のどにさはらず。」雲門禪師、聊
か鼻孔遼天ちやうてんすぎはしませんか。——

山河大地甚處得來、』と云はるゝが、舊きに依つて山は是れ
山、水は是れ水、天は東南に高く地は西北に傾く。——吞却
し了れりとは所謂自己假想の夢物語りではなきや。——夢と
云はゞ夢、——眞理と云はゞ眞理、——拄杖子と云はゞ拄

杖子、——龍と云はゞ龍、——山河大地と云はゞ山河大地。』
——十方無壁落、四面亦無門、と云ふものゝ、東西南北四維
上下あるを如何せん。——之是の眞空妙有、妙有眞空の中に

處して、處處眞々々々、或時は拄杖子となるも亦得たり、或時は龍となりて乾坤を吞却するも亦得たり、東家に去つて驢となり西家に来つて馬となるも亦復得たり。——豈驚かんや、西江を吸盡する口、又江西の一派を出し來るを。——畢竟如何。拄杖子。——

◎頌

拄杖子吞乾坤、徒說桃花浪奔、燒尾者不在、拏雲攫霧、曝腮者何必喪膽亡魂、拈了也、聞不聞、直須灑々落落、休更紛々紜々、七十二棒且輕恕、百五十難放君、師鷲拈拄杖下座、大衆一時走散、

讀方

拄杖子、乾坤を吞めり、徒に説く桃花の浪に奔ることを。尾を燒きし者は在らず、雲を拏へ霧を攫めり。腮を曝す者、何ぞ必ずしも膽を喪し魂を亡ぜん。拈じ了れり。聞くや聞かずや。直に須く灑々落落たるべし。更に紛々紜々たることを休めよ。七十二棒、且く輕恕す。百五十、君を放ち難し。(師、鷲に拄杖を拈じて下座す、大衆一時に走散せり。)

字解を略し、要點だけ簡單に述べておきます。支那の古代史に依ると、昔、支那に大洪水があつた。(今日でも屢々大洪水がある。)其の時、禹が堯帝に命ぜられて大いに治

水工事を起された。完成したる治水工事の中で最も大なるものが二つあつた。一は黄河の上流の龍門山を切割つて黄河を通じた、それと、『もう一つは楊子江の上流の西陵峽を切割つて楊子江を通じた、それである。』思ふに洪水は西藏方面から汎濫して來たものと見える。——今現に禹門又は龍門と云ふ處が二ヶ所ある。一は黄河の上流の龍門、一は楊子江の上流の龍門。雪竇禪師の云はる、禹門は河南省の禹門を指したものでらしい。(井上君の説) 敢へて支那に限らず、日本でも春の花の咲く時分になると、魚類が浮氣になつて川と云ふ川に群をなし隊をなす。特に支那では陽春三月の頃、無數の鯉が禹門の瀧に群集し

て來る。非凡拔群とも云ふべき魚は首尾よく瀧を上り、一躍して龍と化し速に上天する。凡庸の輩は水におし流されて下方に向つてウロ／＼する。古人の句に、二十四聖皆點額、觀音一人登龍門、とある。是は觀音一人が首尾よく試験の龍門に上り得たと云ふことである。昔支那では試験合格者を登龍門の士と云ふ。——燒尾と云ふは、拔群の魚が上天するとき、天地鳴動、自然に一大雷火が起り、その魚の尾を焼き盡すと云ふ傳説による。雪竇禪師は、拄杖子の魚が瀧を上り雷火に尾を焼き盡されて眞箇の龍となつた、と吟じたのである。

以下、頌の始めより提講を致します。

拄杖子吞乾坤、と本則の全體を第一句に吟出されたのは雪竇禪師の茶飯底。特に拄杖子と云うたのみで、龍と化すと云はぬ處に花も實もある。——龍となしたら犬は打たれぬ。又斷橋の水を過ぎたり無月の村に歸る伴にはならぬ。されど何時の間にか、電光石火裏に拄杖子、龍と化し去つた。それを知らずに居る様子を、三級浪高魚化龍、痴人猶辱野塘水、と吟すべきを徒説桃花浪奔、と云はれたは流石に雪竇禪師、句、短にして意、長し。——

既に拄杖子化して龍となる、其の自在、其の自由、雲を拏へ霧を攫む。之を神通以上の神通、妙用以上の妙用と云ふ。——

此の神通妙用に逢うては三世の諸佛も平身低頭するより外はない。——拄杖子とは何者のことか。龍と化すとは何を云ふ。

——諸佛衆生本來無異、尾を焼き昇天する者も腮を下流に曝す者も畢竟兩邊なし。故に昇天以て悦ぶに足らず、點頭以て悲しむに及ばず。人々氣宇玉の如くならざるべからず。以上本則を頌じ了れり。——故に曰く、拈了也、と。更に大衆に向つて問ふ、聞くや聞かずや。諸君、拙僧の云うたことが能く解つたか、解らないか、と念を推さる。慈悲と云へば慈悲であるが、老婆の慈悲で眞箇の慈悲ではない。眞箇の慈悲は然らず。——解つても解らないでも云うて聞かさう。直に須く灑々落々たる

べし。更に紛々まぎたることを休めよ。』拜聽する必要はない。誰が好んで紛々まぎたるものぞ。何人と雖も灑々落落を望む。それを承知で云はれたとすれば門下生を輕視したことになる。それを知らずに云うたとすれば雪竇禪師の愚や思ふべし。』衲は雪竇禪師に向つて云ふ、「禪師直に須く灑々落落たるべし。更に紛々まぎたることを休めよ。」と。

雪竇禪師は、若し紛々まぎたるにして灑々落落たる能はずば輕くとも七十二棒を與ふ、と云はるゝが、如何にも手ぬるいく。圓悟禪師も雪竇禪師の手緩きを見かねて曰く、「山僧は曾て此の令を行ぜず。山僧ならば、息の根のとまるまで打つて打つて打ち

するてやるぞ。」と如何にも圓悟禪師は爲人度生かんとどしやうに親切である。

——雪竇禪師も大罪人を取り遁しては後悔臍を噛むも及び難きに氣がつき、「イヤ輕恕は出來ぬ。是非とも法令通り一百五十棒、一棒も許すことは出來ぬ。」——聊か遲おそき感なきにあらず。されど、なさざるにまさる。師、慕まつに拄杖を拈じて下座。』

諸君、知るや知らずや、雲門の拄杖子と、雪竇の拄杖子と、是れ同か是れ別か。——雲門禪師は雲門禪師の拄杖子、雪竇禪師は雪竇禪師の拄杖子。一の拄杖子は龍と化し去ると雖も、一の拄杖子は拄杖子そのまゝ、それで龍と化してをる。否、龍と化すには及ばぬ。拄杖子そのまゝ、それを杖として、

けれどもと一足づゝは踏みとまれ

ほしい、をしい、の世の渡り川。』

云ふ勿れ、雲門禪師の拄杖子を失却せりと。——之、是、を、拄、杖、子、化、し、て、龍、と、な、り、乾、坤、を、吞、却、す、と、云、ふ。

(昭和十四年四月八日講演)

第六十一則 風穴家國興盛

◎垂示

垂示云、建法幢、立宗旨、還他本分宗師、定龍蛇、別緇素、須是作家知識、劍刃上論殺活、棒頭上別機宜、則且置、且道、獨據寰中事一句、作麼生商量、試舉看、

讀方

垂示に云く、法幢を建て、宗旨を立す、還た他は本分の宗師なり。龍蛇を定め、緇素を別つことは、須く是れ作家知識なるべし。劍刃上に殺活を論じ、棒頭上に機宜を別つことは、

則ち且く置く。且く道へ、寔中の事を獨據するの一句、作麼生か商量せん。試みに擧す看よ。」

字解。

建法幢、立宗旨、經に、法螺を吹き法鼓を打ち法幢を立つ、とある。法幢を建て、江湖の修行者を集め大法を擧揚する道場、其の道場に於て向上の禪風を宣傳する、それを宗旨を立すと云ふ。

還、「かへす、と讀まずして、また、と讀むべし、と井上君の注意。納は平意に、それは、と讀んでおく。」

本分宗師、「本當に大悟したる人、眞箇人天の大導師たる資

格を備へたる禪師。

龍蛇、「龍は具眼の人、蛇は不具眼の人。

緇素、「緇は黒、素は白。熟者、未熟者、と見てよし。

作家、「秀才又は拔群。意味は一家をなしたる人。

知識、「云ふまでもなし、禪の先生、禪の師家。」

獨據、「獨占、獨領、獨握の意。」

寔中、「古句に、寔中は天子の勅、塞外は將軍の令、とある。

故に寔中とは天子様の居らるゝ處、但し法の上で。聞く、大慧宗果禪師が碧巖錄を燒却したる其の理由は、學者が碧巖錄を虎の卷として眞箇に修行せざる、それを憂へて、と云ふのと、

碧巖錄中に、殺人の意、實中の事、家國云々と云ふ文句が諸處に散在して居る處から、時の爲政者に危険思想者と見られ、遂に重大國事犯人として僧衣を剥奪された、之に由つて是を觀れば爲政者の命に應じて或は焼却したのでなきや、』と云ふ説がある。記憶のまゝ書き添へておきます。

提講。

人各々能あり不能あり。宗旨に達して説法に通ぜざる人あり。説法に達して宗旨に通ぜざる人あり。蓋し宗説雙通の人は容易に得がたし。故に法幢を建て宗旨を立する、それは別に本分の大宗師がある。——龍蛇を定め緇素を別つ、それも亦一家を

なしたる博聞知識の人に譲る。——殺人刀、活人劍を以て學者を殺したり活かしたり、棒喝を以て此の事を臨機應變に現前することは、是れ亦宗師家の事業にして作家の知識に關することであるから、それはそれとして、獨據する底の一句、神聖にして如何なる人と雖も侵すことの出來得ざる、それは如何に相談したものであらう。それは本則の主人公たる風穴禪師の垂語に實參して知るより外なし。サア本則に實參なさい。——

◎本則

舉、風穴垂語云、若立一塵、家國興盛、不立一塵、家國喪亡、(雪竇拈拄杖云、還有同生同死底衲僧麼)

擧す。風穴垂語して云く、「若し一塵を立すれば家國興盛し、一塵を立せざれば、家國喪亡せん。」（雪竇、拄杖を拈じて云く、還た同生同死底の衲僧有り麼。）

字解。

風穴、名は延沼。曾て郢州の公廳で、祖師の心印狀ち鐵牛の機に似たり、と云ふ上堂をなされた禪師。——此の垂語も或公廳に於て官吏を對機としてなされたのであるかも知れぬ。

——僧となつては須く山谷に居すべし、國土宴中甚だよろしからず、と云うた人がある。風穴禪師の如き、和して流せざる

人であれば敢へて妨げなし。

立二塵、一塵は一念發起のことで、指頭を以て易々と拈出し得らるゝ塵埃のことでは無論ない。蓋し一念發起は、一身にいても一家にしても一國一天下にしても、其の働き如何に依つて興廢存亡に大いに關係する處。故に輕舉妄動は大なる禁物。佛になるも魔になるも鳶となるも蚯蚓となるも一念發起にある。一念の迷ひに地獄を造り、一念の悟りに極樂を成す。——

同生同死、苦樂を共にする、或は共鳴、——又は意氣投合。——

提講。

風穴禪師が聽講者に向つての垂語、全文は長し今は略して此の如し。』若し一塵を立すれば家國興盛し、一塵を立せざれば家國喪亡す。家國と云うても必ずしも家國に限つてはをらぬ。

——由來眞理とか大道とか又は眞如とか法性とか、種々様々に名目はあるものゝ、其の實體は一である。一と云うても二に對する一ではない。所謂絶對的の一である。其の一とは抑々何ものか。——臨濟禪師は、もと是れ一精明、分れて六和合となる、と云うて居らるゝ。其の六和合が無限大の宇宙となり、無數の森羅萬象となる。是を一面から見れば平等無差別、——是を一面から見れば差別無平等。——平等無差別より、一塵

を立すれば家國興盛。差別無平等から、一塵を立せざれば家國喪亡。毫釐も差あれば天地懸隔で、一念發起の善惡毫釐の差が家國興盛とも喪亡ともなる。更に一步を進めて云へば、一塵を立せざる所が眞の家國隆盛、——一塵を立する所が眞の家國喪亡。——眞箇恁麼の妙境を知らんと欲せば實參實悟して了解すべし。——雪竇禪師は本則に對し自己の見所より拄杖を拈じて云く、大衆中に同生同死底の衲僧ありや、と。——雪竇禪師、拄杖子を拈出せざれば話が出来ぬか。自力宗を看板としてをるに不似であるぞ。されど今となつては是非もなきこと。敢へて知音を求むる必要なし。自己自身が風穴禪師と同

生同死底であれば、斷然、同生同死底を求めず。常に恒に一塵盡三千大千世界、盡三千大千世界一塵。隆盛すべき家國は自然に隆盛、喪亡すべき家國は自然に喪亡。——自然の二字に着目すべし。過まつて其のまゝの看をなす勿れ。

○頌

野老從教不展眉、且圖家國立雄基、謀臣猛將今何在、萬里清風只自知、』

讀方

野老從教眉を展へざることを。且く家國に雄基を立すること

を圖る。謀臣猛將今何くにか在る。萬里の清風只自知す。』字解。

野老、田夫野人と云ふ意。百姓農民のこと。又は一般の人と見る、敢へて妨げなし。——

從教、野老にゆるせ。したいならさせておけ。唐宋時代の俗語である、と聞く。——

不展眉、眉を展ぶるは安心すること。不の字があるから、憂ふる又は不安、——或は苦しむこと。

分解。

或人は云ふ、此の頌は雪竇禪師、時の爲政に多少の不滿があ

る、と。まさか。――

起句は、禪宗以外の宗旨宗派の人が禪的宗意に反対する、それらに一顧を與へず、驕直に禪機を擧揚したものだ。風穴禪師、敢へて悪意あるに非ず。實は大法を思ふ至誠心から流出したのである。

承句は、風穴禪師の禪宗宣揚は要するに滅私奉公、宗旨を思ふ精神の發露である、と托上して決して自家宣傳ではなきことを證明したものだ。

轉句、風穴禪師の宗旨を思ふ、其の至誠に共鳴する人の少きことを嘆じたのである。

結句、表面兩手を擧げて賛意を寄する人なると雖も心中に共鳴する其の知己知音は蓋し無量無數である、と雪竇禪師が同生同死の旗を揚げられた。

提講。

獅子一吼すれば野干腦裂す、で、向上宗乘の第一義を擧揚すれば、中乘小乘は元より、心外に法を求むる部類の一切は、管に眉を展べざるのみならず、笑倒するあり、驚死するあり、中には憤怒して暴害を加ふるあり。これを家國の事に轉用すれば、非常時の際、何々も税金、是れ是れも税金、――これは是非ともなすべし、あれは是非ともしてはならぬ、と一から十

まで、十から百まで、其の不自由、其の窮窟、それはく眉をシバムルことである。されど家國の隆盛を圖るには是非もなきことである。不平を云ふ者には不平を云はせておけ。不満を鳴らす者には不満を鳴らさしておけ。

たとひ眉を展べようが展べまいが、其のやうのことに委細關せず、巍々堂々、第一義を提唱し來るは要するに、中乘小乘、其の他一切の迷盲、無識の鈍漢をして、眞箇大安心、眞箇大安樂、其の境致を得せしめんが爲の活手段である。故に風なきに波を起し、上堂もし提唱もし、公案も與へ坐禪もさせる。』是を家國の事に轉用すれば、全國民が如何にかれこれと理窟を並べ

ても、如何に佛頂づらをして、委細、見ず聞かず、どしどし家國の雄基に向つて邁往する、それが上に居らるゝ人の爲すべき任務である。其の意は家國をして泰山の安きに、國民をして永遠の樂しみに。それを與へ、それを得せしめんが目的である。

風穴禪師は家國の事柄に寄せ宗乘を建立せらるゝ。其の意氣、衝天と云ふべし。——敢へて衲僧に限らず、日本國民全體が家國の爲に風穴禪師の如き衝天の意氣なかるべからず。

雪竇禪師は本則に對し拄杖を拈じ、還た同生同死底の衲僧ありやと云はれた。それが、謀臣猛將今何在、と云ふ句に當る。茲に於て衲が雪竇禪師の心底を忖度するに、雪竇禪師の意旨

は、垂語なされた風穴禪師の如きは實に向上宗乘舉揚の謀臣猛將である、と。

今何れの處にありや。呼べども應ぜず、招けども來らず。嗚呼蒼天々々。——衲は改めて云ふ、雪竇禪師こそ風穴禪師と、同生同死底の衲僧にあらずや。責任轉換は御遠慮なさい。

雪竇禪師はさすが古狸だ。委細の事は清風が知つてをる、と。

——それはそれとして、即今一塵を立する底の謀臣猛將どこに御座る。——諸君、呼び來つて家國の隆盛を依頼なさい。

——宗旨の舉揚を所望したまへ。』實は諸君お互が謀臣猛將、或は然らん。果して然らば昭和の風穴禪師となり、宗乘も舉揚す、

べい、家國も隆盛たらしめよ。至囑々々。

從容錄に左の如き頌がある。

幡然渭水起垂綸、何似首陽清餓人、

只在一塵分名態、高名勳業兩難泯、

起句、渭水に釣をして居られた太公望は白い髯をはやしてをられた。

承句、伯夷叔齊、これは孤竹君の二子、周の粟を食はず首陽山で餓死された。

轉句、佛法の興廢も一塵の變態、家國の盛衰も一塵の變態。故に一塵と雖も容易ならず。

結句、高名は伯夷叔齊、——勳業は太公望。——

風穴禪師の如きは扶起門から云へば太公望、推倒門から云へば伯夷叔齊、——一人にして兩人の高名勳業を兼ね得たる人なり、と賞讃したのである。——

必ずしも兩人を兼ねるに及ばず。太公望なり、伯夷叔齊なり、各自の意に任せ、力に應じ、太公望となるべし、伯夷叔齊にならざるべからず。徒に醉生夢死する勿れ。』

(昭和十四年四月二十二日講演)

396
304

昭和十四年十月九日印刷
昭和十四年十月十六日發行

著作
發行
兼
印
刷
者

佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社 考査課

終

